1Aa－2

# 乳幼児の食事が味覚感受性や心の発達に及ぼす影響
## ー1歳児・2歳児の場合ー

○岡本洋子*、畦　五月**、田口田鶴子***
（*鈴峯女短大、**美作女大、***倉敷市立短大）

【目的】乳幼児の食生活や食事のあり方が、味覚感受性や心の発達になんらかの影響を及ぼすのではないかということは、子どもの食事行動を考える上で、興味ある課題である。そこで、本報では、これらの点を明らかにするために1歳児および2歳児を対象として、「食習慣や食事状況の観察・調査」、「味覚閾値検査」、ならびに「乳幼児発達検査」を行って、それらの相互関係について検討した。

【方法】岡山県内の3保育園の1歳児および2歳児の乳幼児56名(男児30名・女児26名）について、「養育者による家庭における食事状況の観察」、「遠城式乳幼児分析的発達検査」を行った。また甘、酸、塩味物質の等差濃度水溶液を検査試薬として全口腔法により上昇系列で感受下限閾値を調べた。解析はDuncanの平均値の検定によった。

【結果】（1）半数以上の被験者は、家族と共に食事内容や日常の出来事について話をしながら、楽しい食事をとっており、手作り料理のある食卓であった。(2)1歳児・2歳児では、ショ糖溶液0.2～0.8％,クエン酸溶液0.02～0.06％,塩化ナトリウム溶液0.04～0.16％の濃度範囲で、それぞれ82.2％,91.1％,85.8％の者が甘・酸・塩味を感受した。(3)家庭における食事状況の健全な者は、甘・酸・塩味いずれの閾値においても低い傾向がみられ、味覚感受性の鋭敏さがうかがわれた。(4)家庭における食事状況の健全な者は、発達検査においても良好な結果が得られ、運動・社会性・言語の発達に好影響が現れることが示された。